

佐田町の遺跡

窪田地区



8年3月

西日本山町教育委員会

埋蔵文化財詳細分布調査報告書

佐田町〔2〕窪田地区

図1 佐田町位置図



1988年3月

島根県佐田町教育委員会

発刊にあたって

昭和61年度から始められた本町の埋蔵文化財詳細分布調査も、二年次を終了し、『佐田町の遺跡』第二集・窪田地区編を刊行することとなりました。

窪田地区は、島根県の主要河川の一つである神戸川が、中央を貫流する地域であります。したがって、この川沿いには古くから人びとが住み、地域の開発に着手していたことが考えられているにもかかわらず、遺跡の存在はあまり知られておらず、文字通り、霧につつまれていた地域であります。

今年度の調査によって、地元にも知られていなかった数多くの知見を得ることができましたが、このことは、島根県教育委員会文化課をはじめ、諸先生方の適切な指導、助言によるものであり、また、調査地区内の各位のご協力による成果であります。

ここに、その調査結果を公刊することができましたことを、厚くお礼申し上げます。

しかし、今年度の調査結果が埋蔵文化財のすべてではなく、まだ数多い未知の文化的遺産が、地下に眠っていることはいうまでもないところであります。

本書が、今後における郷土史解明の手がかりとなり、佐田町の歴史の中に新たな頁が書き加えられることを、ここから念ずるものであります。

おわりに、この調査を担当された調査員各位のご労苦に感謝し、発刊のことばといたします。

昭和63年3月

島根県佐田町教育委員会

教育長 佐貫光弘

例　　言

1. この報告書は、佐田町教育委員会が、文化庁及び島根県の補助をうけて行う佐田町内の埋蔵文化財調査のうち、昭和62年度に実施した「佐田地区」の遺跡調査の報告書である。

2. 調査は、佐田町教育委員会が行い、調査組織は次のとおりである。

調査主体 佐田町教育委員会

調査指導 蓬岡 法障（島根県八束郡八雲村立八雲中学校教頭）

勝部 昭（島根県教育委員会文化課課長補佐）

杉原 清一（島根県文化財保護指導委員）

ト部 吉博（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）

松本 岩雄（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）

調査員 田中 達亮（佐田町文化財調査委員）

岩崎 正敏（佐田町文化財調査委員）

佐々木敬志（佐田町文化財調査委員）

永島 安徳（佐田町文化財調査委員）

桐原 幹夫（佐田町文化財調査委員）

調査補助員 山崎 順子

事務局 石崎 勉（佐田町教育委員会教育次長）

栗原 豊（佐田町教育委員会社会教育係長）

三島 勝美（佐田町教育委員会社会教育主事）

調査協力

調査にあたっては次の方の協力、援助をうけた。記して謝意を表する。

三島実郎、深井巖郎、大谷勝義、浜村勇雄、竹下善博、竹下 豊、

石崎友市、田中 薫、今村久人、大谷昌武、安井 潔、橋 重成、

岩崎喜六、土岩 敏、吉川 登

3. 本書の編集・執筆等は、主として、蓬岡、ト部の助言を得て田中がおこない、栗原、山崎がこれを助けた。

4. 本書に記載する遺跡の名称及び地名は、佐田町座田地区の「切図」と土地台帳から収録した「小字名」を基調としたが、一部は地元伝承の通称名も取り入れた。
5. 本書記載の図面の方位は、すべて調査時の磁北である。
6. 「埋蔵文化財包蔵地調査カード」は、二部作成して、一部は島根県教育委員会に提出し、一部は遺跡位置図、出土遺物とともに佐田町教育委員会で保管している。
7. 本書記載の遺跡分布図、同一覧表は、昭和63年1月末現在までのものである。

目 次

発刊にあたって

例 言

本 文 目 次

I	窪田地区の歴史的環境と遺跡の概要	1
	窪田地区遺跡一覧表	5
II	遺 跡 各 説	8
1.	古 墳	8
2.	城 跡	9
(1)	大字上橋波・大字下橋波地区	9
(2)	大字一窪田地区	13
(3)	大字佐津目地区	20
(4)	大字高津屋地区	22
(5)	大字毛津地区	23
(6)	大字東村地区	26
(7)	大字八幡原地区	30
3.	生 産 遺 蹤	33
(1)	鉛 跡	33
(2)	銅 山 跡	35
(3)	窯 跡	35
(4)	炭 窯 跡	35
4.	祭 紀 遺 蹤	36
5.	古 基 ・ 墓	37
6.	遺 物 散 布 地	39

挿 入 図 目 次

図-1	佐田町の位置図	中表紙
図-2	調査範囲の区画図	2
図-3	窪田地区遺跡分布図	3~4
図-4	柳瀬城跡略測図	9
図-5	湯ヶ崎城跡・横見城跡略測図	10
図-6	宮の部城跡略測図	11

図- 7	小鍋・中山砦跡略測図	12
図- 8	小池城跡・小池出丸跡略測図	13
図- 9	天竺丸跡略測図	14
図- 10	二子山城跡略測図	15
図- 11	舟岡砦跡略測図	15
図- 12	伊秩城跡略測図	17
図- 13	吉栗山城跡略測図	18
図- 14	兵庫ヶ丸跡略測図	19
図- 15	佐津目城跡略測図	20
図- 16	宮田城跡略測図	21
図- 17	才ノ岬跡略測図	21
図- 18	佐津目・三ツ子山城跡略測図	22
図- 19	城田山城跡略測図	23
図- 20	熊ヶ丸跡略測図	24
図- 21	後谷城跡略測図	25
図- 22	三ツ子山城跡略測図	27
図- 23	輪ノ内城跡略測図	27
図- 24	萱野城跡略測図	28
図- 25	東本郷砦跡略測図	29
図- 26	城川口砦跡略測図	30
図- 27	蛇喰砦跡略測図	30
図- 28	八幡原城跡略測図	31
図- 29	二百山城跡略測図	32
図- 30	朝日鉢跡炉床中央断面図	34
図- 31	朝日鉢跡炉床中央横断面図	34
図- 32	朝日鉢跡の遺構平面から推定した高殿配置図	34
図- 33	伊秩城跡山腹の岩上に刻まれた盃状穴・平面図	37
図- 34	古墓・石塔・石塔の残欠実測図	38
図- 35	朝日遺跡出土遺物実測図	39

題字 土岩 默（佐田町長）

I 篠田地区の歴史的環境と遺跡の概要

古代

今年度、調査を行った篠田地区は、佐田町をほぼ南北に通る線で三分した西側の地域にあたり、その中央部を鳥取県の主要河川のひとつである神戸川が南北に貫流する。その主な支流には、北三瓶を源流とする伊佐川と、佐田町の南端の高地である吉野地区を源流とする高津屋川がある。

『出雲國風土記』勘定の時点（天平5年（733））では、この地区は「神戸郡余部里」と呼ばれ、まだ郷を形成する規模にはいたっていなかった。それから数年後の天平11年（779）の『出雲國大税賦給置名帳』（注1）では、余部里は「伊秩郷」となり、この郷には「坂本里」「坂奈里」の二つの里があったと記されている。数年の間に「余部里」は「郷」に成長したのである。

この地域での古代遺跡は、近年まで確認されていなかった。

しかし、元橋波小学校（大字下橋波）の敷地を拡張する際に、土製支脚が出土したという記録がある。また、昭和57年に高津屋川流域の朝日地区で、水田の中から鉢跡が発見されたが、この鉢跡の発掘調査を行った際に、鉢用地を造成するために埋立てられたとみられる土中から二次的な熱によって変色しているが、縄文時代後期半～末葉のものと判断される、粗製純文土器の深鉢片や、石器類（石鏟・剣片）が採取された。大字一塙田・共和地区的「犬塙」と称する山の上には、2基の古墳があることが確認された。

このように、篠田地区の古代遺跡の実態が、次第に明らかになってきた。

中世

中世の遺跡は、山城跡関係の遺跡が多い。中でも一塙田の伊秩城跡は広く知られている。そのほかにも30か所余りの城跡がある。

伊秩郷は、郷土史料によると、木島松助入道、佐々木常宗、伊秩政行らの莊園領主の時期を経て、尼子氏と毛利氏の雲芸攻防戦終末期まで、めまぐるしい時局の変化があったことが伝えられている。

城跡の中には、山城築城初期とみられるものから、戦国末期の破却期直前のものまで、大まかではあるが、山城築城技術の発展過程をたどることができる。

特に終末期の山城と推定される伊秩城は、城の位置（標高）を下げ、周辺の集落を城の輪郭の中に取り込み、地域を守る拠点としての機能を高めようとしており、近世城郭に最も近づいた形態といえる。

この時代にかかる古墓として、宝鏡印塔、五輪塔があるが、城跡のある山麓部には、これらの塔の残欠が点在し、その地域では一般に「さむらいの墓」といわれている。

生産遺跡は、一塙田地区の鐵山谷と佐津目地区に銅山跡がある。いずれも大永年間（1521～）に開発されたと伝えられ、以後、断続的に採掘され、昭和年代まで続いた。特に、佐津目的銅山跡は、多くの坑口のほかに、新旧3か所の精錬所跡があり、近世の地方文書は、最盛期

には山稼の職人小屋が一千軒余も軒を連ねていた、と伝えている。

中世以前にさかのぼると推定される製鉄遺跡は、八幡原地区の二百山城跡の北側山麓に「大寄合鉛跡」がある。

近世

江戸時代は、神戸川の治水と新田開発、鉄山興亡の時代といえる。

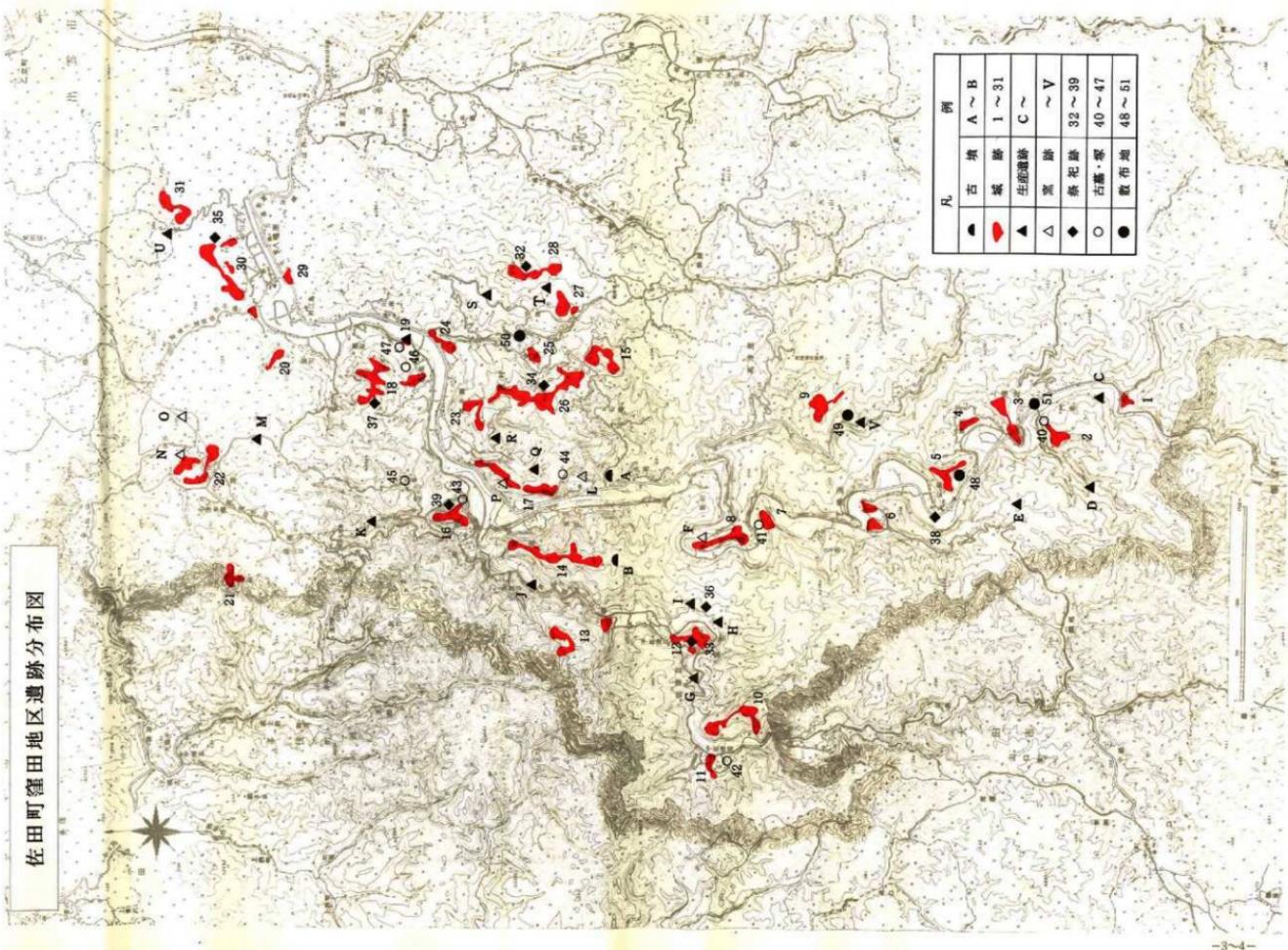
鉄穴流しの砂鉄を用いた新田開発は、近世中期以降に盛んに行われるようになった。しかし神戸川周辺の地域は、洪水のたびに被害を受けたことを、近世文書は伝えている。

出水の際に中国山地の奥部から大量の砂と共に流れ出る川砂鉄の採取は、沿岸農民の生活のかたでもあったようである。それほど砂鉄を原料とした「たたら製鉄」は、この地方での重要な地場産業であったことが、遺跡の分布状況と地方文書によって知ることができる。窪田地区で最後まで操業された鉛は、一産田の「加賀谷鉛跡」である。この鉛は、坂元郡多伎町の奥田儀・宮本の桜井家に所属していた鉛で、明治15年に宮本の桜井家の拠点が火災によって消滅し、同家が再興不能となった時点で操業を終えている。

注1 正倉院文書で、律令時代の生活保護救済の対象となった者の人名簿である。出雲郡と神門郡の2郡が残されている。



佐田町窪田地区遺跡分布図



蓮田地区の遺跡一覧表 (図面番号は遺跡分布図番号と一致する)

図面No	種別	名 称	地 目	現 状	所 在 地	所 有 者
A	古 墓	犬塚古墳	山	山	大字一蓮田犬塚3912	山本重信
B	古 墓	橋ヶ谷墳丘墓群	山	山	大字一蓮田3689~3703	山本詮外

1	城 跡	保井谷小丸跡	山	山	大字上橋波482	渡部マヨ
2	城 跡	柳瀬城跡	山	山	大字上橋波755~756	三島実郎
3	城 跡	滝ヶ崎城跡	山	山	大字上橋波276	深井徹郎
4	城 跡	横見城跡	山	山	大字上橋波542	深井徹郎
5	城 跡	宮の部城跡	山	山	大字下橋波七ノ原55	石橋重敏 外
6	城 跡	小嶋・中山砦跡	山	山	大字下橋波985の2小嶋 992の2中山	大谷勝義 外
7	城 跡	小池城跡	山	山	大字下橋波415	浜村勇雄
8	城 跡	小池城出丸跡	山	山	大字下橋波879	吉川茂
9	城 跡	城田山城跡	山	山	大字高津屋481	有馬毅一郎
10	城 跡	佐津目城跡	山	山	大字佐津目郷原847	大谷敏
11	城 跡	宮田城跡	山	山	大字佐津目337	神社地
12	城 跡	才ノ崎城跡	山	山	大字佐津目974の1	佐々木敬志
13	城 跡	佐津角・三子山城跡	山	山	大字佐津目1019~1021	公園有地
14	城 跡	天益丸跡	山	山	大字佐津目791	田原千里
15	城 跡	三子山城跡	山	山	大字一蓮田1323~1332	大矢政雄
16	城 跡	伊秩城跡	山	山	大字一蓮田3488~3498	奥野乙三郎外
17	城 跡	舟岡砦跡	山	山	大字一蓮田清水3875~	土岩烈
18	城 跡	吉栗山城跡	山	山	大字一蓮田3299~	寄藤宗弘外
19	城 跡	栗原丸山砦跡	山	山	大字一蓮田丸山374	栗原勝右衛門
20	城 跡	兵庫ヶ丸跡	山	山	大字一蓮田原平108	石崎秀雄
21	城 跡	熊ヶ丸跡	山	山	大字毛津668	松田賢秀外
22	城 跡	毛津後谷城跡	山	山	大字毛津勝負廻573~外	毛津後谷地区

図面No.	種別	名 称	地 目	現 状	所 在 地	所 有 者
23	城 跡	東本郷跡	山	山	大字東村大以後1486	鳥屋尾 武
24	城 跡	城川口砦跡	山	山	大字東町城川尻 1049	鎌田 優
25	城 跡	萱野砦跡	山	山	大字東村 1341~1345	一ノ渡 一夫
26	城 跡	萱野城跡	山	山	大字東村奥垣内 1371	神田 義晴
27	城 跡	輪ノ内城跡	山	山	大字東村輪ノ内 1228 の1	一ノ渡 正
28	城 跡	三ツ子山城跡	山	山	大字東村 1122	公 有 地
29	城 跡	蛇喰砦跡	原 野	山、墓地	大字八幡原蛇喰 762	一ノ渡 義満
30	城 跡	八幡原城跡	山	山	大字八幡原引杉 1089	土井豆正義外
31	城 跡	二百山城跡	山	山	大字八幡原下山 853の5	岩崎 茂 外

C	生産遺跡	檜原鉛跡	山	竹 林	大字上橋波 24~31	神田伊造
D	生産遺跡	柳瀬鉛跡	山	山	大字上橋波柳瀬谷	公 大田市
E	生産遺跡	空山鉛跡	山	山	大字上橋波 813	橋 重成
F	生産遺跡	小池窯跡	山	田	大字下橋波 859の1	和泉広吉
G	生産遺跡	小佐津日鋼山精錬所跡	田	田	大字佐津日宮田 457	古志勝三郎
H	生産遺跡	三味錬瓦精山精錬所跡	山	山、田	大字佐津日糸ヶ谷 831	大昭和製紙
I	生産遺跡	佐津日自鋼山精錬所跡	山	山	大字佐津日長谷 825	佐々木豊之進
J	生産遺跡	加賀谷鉛跡	田	田	大字一庭田 1337の1	山崎久和
K	生産遺跡	銀山洞山跡	山	山	大字一庭田銀山谷	公 有 地
L	生産遺跡	仁江瓦窯跡	山	山	大字一庭田 3888の3	野津博道
M	生産遺跡	毛津鉛跡	山	山	大字毛津カジヤ垣内600	園山修三
S	生産遺跡	毛津大人瓦窯跡	山	埋立地	大字毛津 562	田中宏紀
O	生産遺跡	毛津中東瓦窯跡	宅 地	宅地跡(廃虚)	大字毛津 586の5	柳楽俊則
P	生産遺跡	舟岡瓦窯跡	山	山	大字東村仁江畔 1576の2	石崎英一
Q	生産遺跡	草木谷鉛谷鉛跡	田	田	大字東村 315の1	大谷久雄
R	生産遺跡	草木谷古鉛跡	道路、田	道路、田	大字東村 238の1	百田誠

図面No	種別	名 称	地 目	現 状	所 在 地	所 有 者
S	生産遺跡	受地鉛跡	山	山	大字東村935	大矢宗良
T	生産遺跡	神田古鉛跡	田	田	大字東村775	石橋一夫
U	生産遺跡	大寄合鉛跡	山	山	大字八幡原札場25	土井豆悟
V	生産遺跡	朝日鉛跡	公有地 (公有地)	指定史跡	大字高津屋343	公佐田町
32	祭祀跡	三ツ子山遺跡	山	山	大字東村1122	公有地
33	祭祀跡	下佐津目寺院跡	山	山	大字佐津目974の1	佐々木敬志
34	祭祀跡	東村寺院跡	宅地、山	山	大字東村503~516	神田義晴
35	祭祀跡	八幡原寺院跡	山	山	大字八幡原ゴワン131	岩崎剛
36	祭祀跡	下佐津目祭祀跡	山	山	大字佐津目833	佐々木敬志
37	祭祀跡	巖の原神社跡	山	山	大字一鹿田梅木ヶ谷667	神社地
38	祭祀跡	橋波祭祀跡	田	田	大字橋波182	三島等
39	祭祀跡	伊秩城 山廬の添状穴	—	岩	大字一鹿田(古城山の内)	奥野乙三郎
40	古 墓	柳瀬古墓	墓 地	墓 地	大字上橋波235	三島実郎
41	古 墓	小池古墓	墓 地	墓 地	大字下橋波876	吉川茂
42	古 墓	宮田古墓	雜種地	墓 地	大字佐津目310の1	吉川政雄
43	古 墓	智光寺古墓	墓 地	墓 地	大字一鹿田8483の3	酒井治美
44	古 墓	仁江古墓	山	山	大字一鹿田2066の1	土岩勲
45	古 墓	五谷古墓	山	墓 地	大字一鹿田872	寄藤茂
46	古 墓	栗原古墓	墓 地	水路跡	大字一鹿田471の2	栗原敬
47	古 墓	栗原丸山古墓	墓 地	墓 地	大字一鹿田374	栗原勝右衛門
48	遺物散布地	橋波遺跡	公有地	校舎	大字上橋波上ノ原29	公佐田町
49	遺物散布地	朝日遺跡	公有地	指定史跡 (公有地)	大字高津屋343	公佐田町
50	遺物散布地	城川遺跡	川	谷 川	大字東村	排水路(谷川)
51	遺物散布地	門曲遺跡	田	道 路	大字上橋波	公島根県

II 遺跡各説

1 古墳

1. 犬塚古墳群

大字一塞田・共和地区の小丸山（標高 193 m）山頂部（字犬塚）にあり、南斜面の中腹には、「妙見社」が祀られている。

古墳は、今度の分布調査によって確認されたもので、3基の方墳があったものと推定されるが、1基はすでに発掘されていて、実態は明らかでない。残る2基のうち、西側の1号墳は $10.0 \text{ m} \times 8.0 \text{ m}$ 高さ 0.5 m の段状を示し、2号墳は、その東にあって $8.0 \text{ m} \times 9.0 \text{ m}$ 高さ 0.5 m である。いずれも遺物について不明である。



犬塚古墳群の遠景（中央の小山）（南側から）

2. 植ヶ谷古墳

神戸川左岸の標高 355 m の山頂にある。神戸川をはさんで犬塚古墳群に相対する位置にあり、円墳と推定される。規模は、直径 8.0 m 高さ 0.8 m である。

この近くに、直径 1.0 m 高さ 0.3 m の円形の高まりがみられる。これは古墳時代以降の墳墓と推定される。ほかにも何基かあったと推定されるが、植林の際に掘りかえされ、実態は明らかでない。

2. 城 跡

(1) 大字上橋波・大字下橋波地区

佐田町の南端の集落で、南は畠原町、西は大田市に接した神戸川沿いの地域である。他に比較して城跡の多い地域であるが、他郷村との境界であることが、その理由と考えられる。

城が設置されている場所はいずれも、川の曲線内側に突出する山地の先端部か、その稜線上である。

1. 柳瀬城跡（標高 355 m）

神戸川左岸にのびる尾根先端の峰で、山頂の主郭部には櫓台跡が残る。

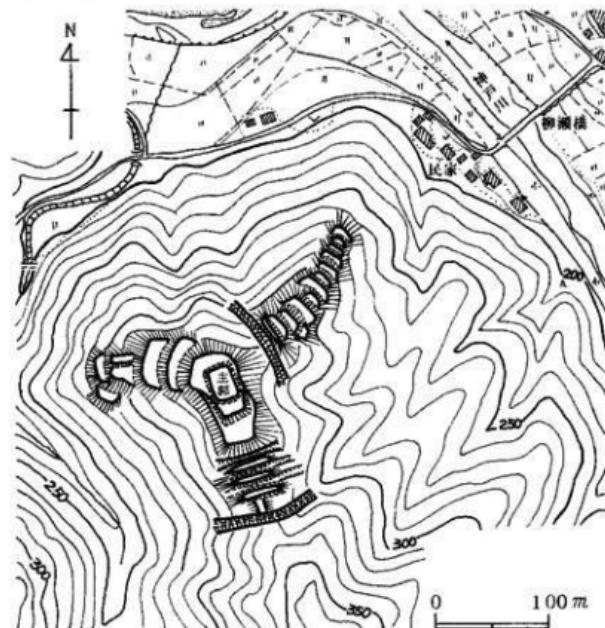
主郭の南側斜面は削り落した壁とし、直下の鞍部には三重堀切り、陸橋、そして堀切りと、三段に設け、尾根伝いに侵攻する敵を遮断する実戦的な構えである。

西側の斜面には、大形の曲輪と土塁を配置し、北東に降りる棱線には、主郭部直下から堀切り、土塁の下部に曲輪群を階段状に配置している。

この山の東側山腹には、近世の墓地群があるが、その一隅で宝塚印塔の残る2基が出土している。

この城山から、700 m 南方の神戸川右岸に「小丸」の小字名がつく小山（標高 264 m）がある。山頂部は2段の削平地となっており、直下の鞍部には堀切りが残る。このことからこの小山は監視と情報伝達のための砦跡と推定される。

『出雲稽古今図説』（注1）には、「上橋波、築瀬山の城主、柳瀬大膳太夫」とある。

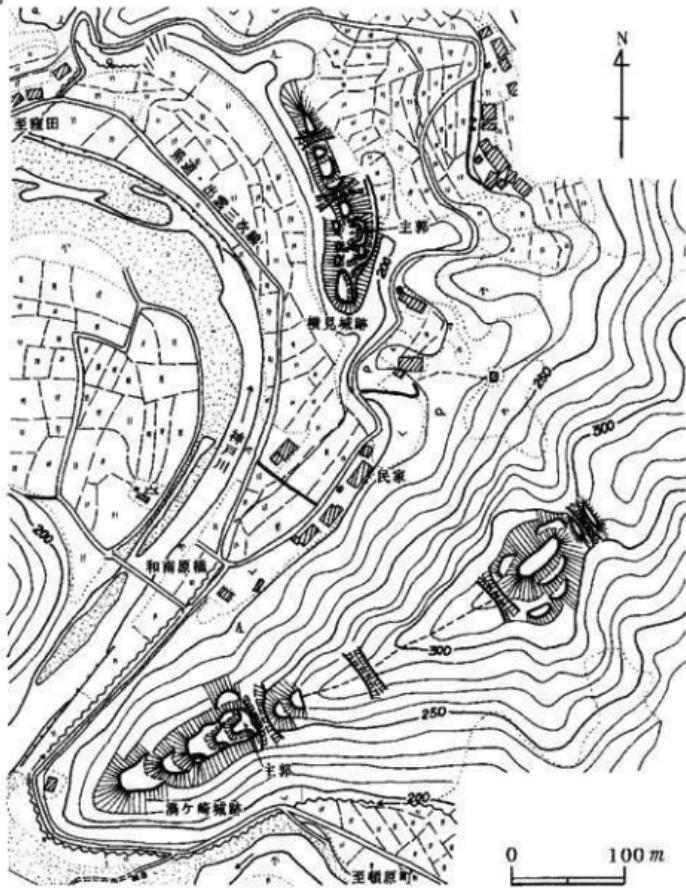


第4図 柳瀬城跡略圖

2. 湾ヶ崎城跡 (標高 320 m)

神戸川をはさんで鷹瀬城跡の対岸に突出する尾根の稜線上に設けられた城跡で、造構は山頂部から北西先端部までの稜線上に配置され、山頂部から東の斜面は切り落し、直下の鞍部は土塁と堀切りによって遮断している。山頂部の南側緩斜面には曲輪群を配置している。

北西に下降する稜線上には 2か所に堀切りを置き、更に先端山頂部の東側直下には大堀切りを設けて、稜線を突破してきた敵に対し、この位置での完璧な遮断を意図している。大堀切りの真上には、自然石を粗雑に積んだ 3段の曲輪として、最上段には柵台を設けた形跡がみられる。



第5図 湾ヶ崎城跡（南側）・横見城跡（北側）略図

このことから、この先端の区画が城の主郭部にあたるものと考えられる。

3. 橋梁跡（標高 220 m）

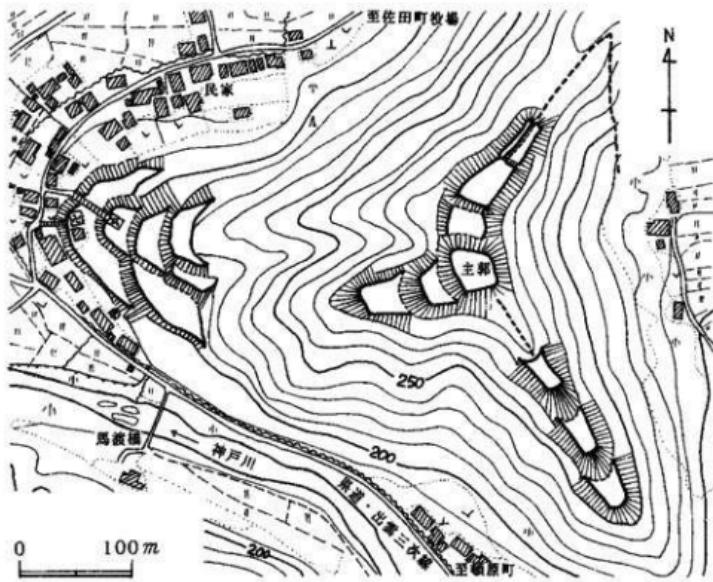
小字名に「城山」の地名が残る城跡で、全長200mの稜線上に、直線状に遺構がみられる。北側を削り落した壁にし、自然地形を利用した物見台、堀切り、土壘、曲輪群を連続して配置している。東西両側は急峻な地形を保存し、南曲輪から東側へ降りる虎口を設けるなど、小規模ながら緻密な構造となっている。

4. 宮の部城跡（標高315m）

「宮の部」は橋渡地区の中心となる地域である。

城跡は、神戸川右岸へ岬状に突出する稜線の先端から、三方にのびる支尾根に削平地、曲輪群を配し、技巧性の乏しい構造である。

皆の部集落の東側山麓には、広い削平地が階段状に展開し、現状は墓地団地、神社、寺などの敷地となっているが、城と関連する何らかの施設があったものと推定される。



第6図 宮の部城跡略測図

5. 小鍋・中山峠跡（標高 220 m）

神戸川左岸へ南側から突出する尾根の先端に、東西200mの間隔をおいて、二つの岩跡があ

る。

西側の小鍋砦には、頂上の削平地に櫓台を設けた形跡がみられる。南から入る木戸の西側を削り落して切岸を設け、陸橋状に幅を狭めている。

東側の中山砦は、南側の鞍部を堀切りで遮断し北東に降りる緩斜面には階段状に曲輪を配置して、街道を見下ろしている。

両砦とも石見地方へ通する街道（現在の県道、大田・三刀屋線）に面した位置で、神戸川の上下流域に置かれた各城跡から見通せる地点にある。

6. 小池城跡

（標高 254 m）

橋波地区の北端に位置

する城跡で、神戸川が

180度旋回するほど迂回する内側に、細長く突出する尾根の稜線上にある。

山頂の狭い区画を主郭とし、ここに櫓台を置き、東側の斜面は削り落しながら曲輪を配置し、岩尾根となっている主郭の東側の鞍部は三重堀切りで遮断している。

北方に長くのびる稜線上には、堀切り、土塁、曲輪、陸橋などが連続して配置され、川沿い両側の低地を見下している。

『出雲古知今図説』に、「下橋波村・古城主・小池藏之丞」の記載がみられ、西側山麓には「小池」「馬場くぼ」の地名がある。

7. 小池城出丸跡（標高 211 m）

小池城跡と神戸川をはさんで南対岸の尾根先端部にあり、広い3段の削平地と、両側の斜面に曲輪群を配置しただけの単純な構造である。

台地状の地形から主峰に至る尾根の基部は、堀切りで切断しているが、この地点は、旧街道の三叉路になることから、街道の抑えとして配置したものと考えられる。



第7図 小鍋（西側）・中山（東側）砦跡略測図



第8図 小池城跡（北側）・小池城出丸（南側）跡略圖

(2) 大字一畠田地区

この地区から神戸川の流域は広くなり、沖積地と河岸段丘が展開する。その中心部に伊秩城跡がある。

伊秩城は、応仁の乱での戦功により、因幡國から山名宗全の被官人・井筒行守が移封され、井筒を改め、地名の伊秩を姓にしたと伝えられている（一塙田・明教寺縁起）。

一塙田地区は、初期のものから戦国末期の破却期直前のものまで、大まかに山城の発展過程がたどれる地域である。

城砦に関する地名（小字名）として、和殿丸、矢倉谷、大成、殷原、丸山、茶山、朝倉大城、土井上、羽城、古城山、空ノ段、天竺、腹切岩、越ヶ丸などがある。

8. 天竺丸跡（標高348m）

神戸川と、その西側を流れる伊佐川にはさまれた丘陵の後綫に曲輪を配置し、鞍部には小規模な彌切りを設けるもので、技巧性には欠けるが、遺構は広範囲におよんでいる。

北にのびる尾根の先端は、旧街道をとり込んでおり、その周辺の曲輪群は街道の監視と、抑えを目的としたものとみられる。

『豊陽誌』（注2）は、神門郡一塙田の条に、この城跡について「古城山・里民伝・鬼の城という、天竺ともいいう、由来未考えず、東は一塙田、西は佐津目郡の高山なり、風土記に載る古樂山此所なるか」と記している。

9. 二子山城跡（標高417m）

石場峠南側の独立峰で、大字一塙田と大字東村との境界の山である。2つの峰が馬蹄形の稜線で結ばれていることから、二子山と呼ばれている。

山頂と稜線上に広い削平地、曲輪、陸橋などが配置され、南側の山頂には櫓台を設けた形跡がみられる。

この地点からは、西側の神戸川沿岸部一帯、北側の峰を隔てた壹野城跡、東側の壹野、受地地区一円を見通せる。

城跡の構造は粗放であり、防御面を軽視していることが注意される。



第9図 天竺丸跡略測図

10. 舟岡砦跡

(標高 180~230 m)

神戸川右岸を、南北に細長くのびる山丘の稜線ヒ700mにわたって削平地があり、各支丘にも曲輪跡と推定される削平地が点在する。

北端には、棧台を設けたとみられる土壇状の高まりがあるが、これらの遺構は後に居住地、瓦窯、耕作地などに転用された形跡がある。

この稜線の北側の地域は、大字東村に属し、主郭部と推定する南側山頂は、大字一庭田に属する。

吉栗山城跡、伊秩城跡と神戸川を隔てて相対応する位置にあり、構造は技巧性に乏しい。

主郭部と推定する南側の山



第10図 二子山城跡略測図



第11図 舟岡砦跡略測図

頂から、仁江地区的集落へ降りる山裾には、墓地団地のほかに小規模な削平地が点在するが、かつては曲輪群が配置されていたものとみられる。

この地点で宝慶印塔の残欠が1基検出された。



仁江地区的宝慶印塔の残欠

11. 伊秩城跡（標高 236 m）

窪田地区の中では、最も整った城跡である。

位置は、神戸川と伊佐川の合流地点下の左岸、独立峰に構築され、山裾には「町」と呼ばれる集落が展開する。

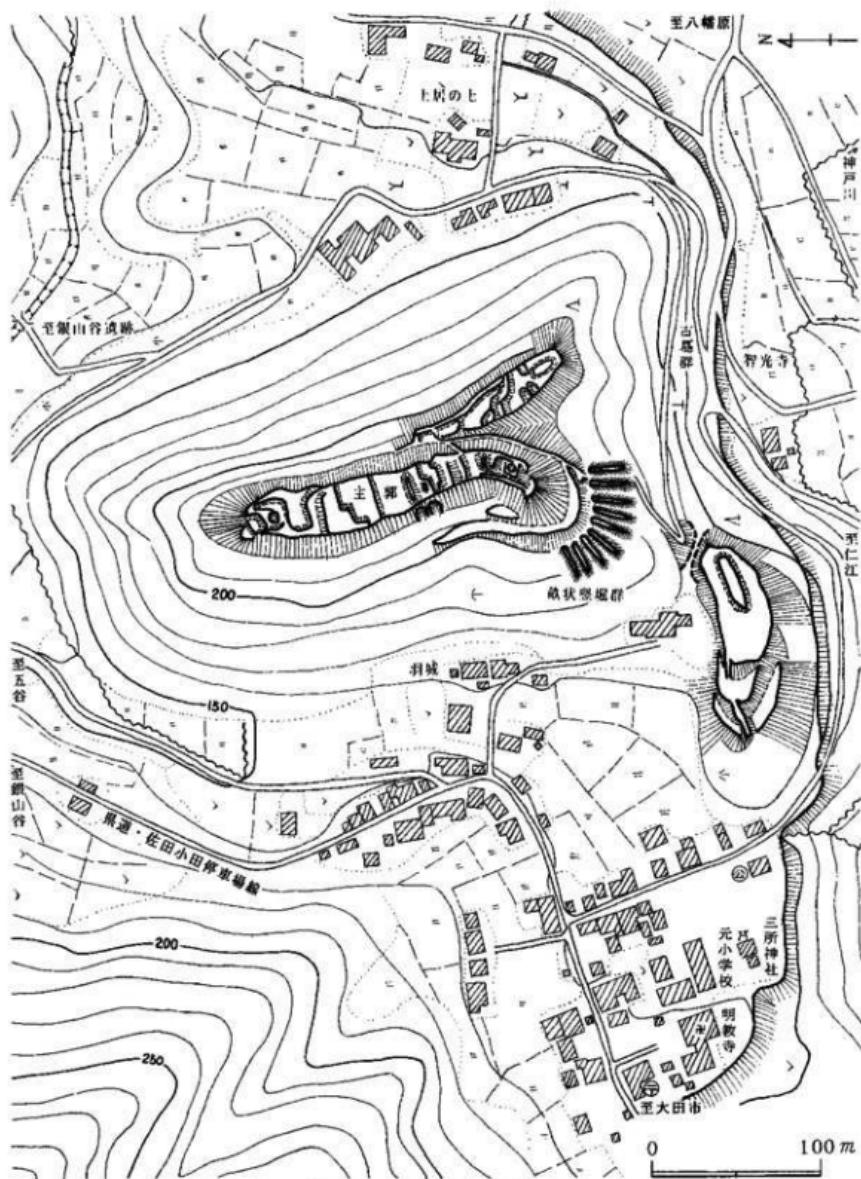
構造は、南北にのびる丘陵上面を広範囲に削平し、東西は急峻な斜面を残している。主郭部から南側の遺構をみると、土塁、曲輪、竪土塁、腰曲輪などを配し、その下の緩斜面には、8条からなる歯状の竪堀群が設けられている。南東へのびる支丘上にも曲輪群があり、その東側には土塁が設けられている。また先端の曲輪には櫓台を設けた形跡がある。

この丘陵から一段下がって南西に続く丘陵の鞍部は、大堀切りで遮断されている。丘陵の頂と南側斜面には、平坦地がみられるが、伝承によると、この丘は「段ノ辻」と呼び、城兵の訓練所があったところという。

この城の特徴的な部分をあげてみると、山頂に近い位置の南北2か所に、水源用とした井戸が掘られている。また主郭部南側にある第3郭東側の虎口から北東に下る坂道に突当りには、「腰し曲輪」と称される施設が設けられている。その位置から反転して谷底を降りる通路は、両側から横矢攻撃を受ける構造となり、南側の斜面には歯状竪堀群（歯型阻塞）がある。この施設は、緩斜面を強化するために構築されたもので、佐田町では高櫛城跡（西須佐）、立花城跡（東須佐）にもみられ、攻め登る敵の横移動を封じる構造となっている。

この城については、前述の井筒行守の移封以後、大永3年（1523）尼子経久の攻撃をうけて落城し、その後、経久の子・元久？が伊秩姓を名乗って、この城に入ったといわれる（佐田町史）。尼子氏が解代されたあと、毛利氏は出雲国内36か所の城に城督を置くが、その中に伊秩城と須佐高櫛城もある。（注1）

この城跡の南側山裾には宝慶印塔、五輪塔の残欠が集中する古墓群がある。



第12図 伊秩城跡略図



第13図 吉栗山城跡略測図

12. 吉栗山城跡（標高 310 m）

伊秩城跡から神戸川沿い 1500 m 下流左岸に、標高 300 m 級の峰が連なる山地があり、吉栗山城跡の施設はこれらの稜線上を中心に設けられている。この山は『出雲国風土記』で、『出雲大社の造営材を伐り出す山』と伝える山である。

連峰は 4 つの峰からなり、主郭部を中心の峰におき、頂部には櫓を設けた跡がみられる。

遺構は、山頂、稜線、鞍部に堀切り、土塁、陸橋、曲輪を組合せ、南に下降する支尾根の先端と、川沿いの小丸山に砦（出丸）を配置するなど、広範囲におよぶ城郭である。

この城の創設については、興国 2 年（1341）に佐々木備後守常宗が、足利尊氏の命によつて吉栗山に築城した（佐田町史）といい、『出雲舊古知今圖説』（注 1）は「下古志村十藏山ノ城主・佐々木古志因繩守重信、後一久保田村・栗柄山へ移リテ城ヲ築クトモ見ユ」と記し、更に「一久保田村・立栗山城主・伊秩甲斐守」とも記されている。

栗柄山、立栗山は、字栗原地区にあるこの吉栗山の連峰を指したものと考えられる。

前述する伊秩城の西山側に「羽城」の小字名が残ることから、かつては吉栗山城を根城として、現在の伊秩城はその枝城であったことが考えられる。

13. 兵庫ケ丸跡（標高 320 m）

神戸川左岸の原川地区に、西側の山地から突出した尾根があり、正面からみると三角錐形に見えることから、地元では「おにぎり山」と呼んでいる。この城跡はその丘陵の先端部に設けられている。

遺構は、やせ尾根の先端から稜線上に、小規模な曲輪と堀り切りを直線状に配置ただけの



第 14 図 兵庫ケ丸跡略測図

簡易なものである。天陥を利用し、両側を攻撃不可能な状態におき、岩尾根に曲輪を配置して背後の山地に逃げ口を確保している。このような構造は、昭和61年度に踏査を行った東須佐地区・大字宮内の「羽山城跡」と同じ形態である。

この「兵庫ヶ丸跡」は、村の北側にあって原川から七町の距離にある。昔、明石兵庫守がこの城を築いた（神門郡誌）といい、地元の伝説によると「備後國から落ちのびた岩崎和泉守、川合日向守、内藤雅樂尉が、この城で八幡原を永住の地に定めることを、誓った」という。

(3) 大字佐津目地区

佐田町西端の地域で、集落は北三瓶を源流とする伊佐川流域に展開し、大田市と多伎町との境界にある。伊佐川右岸の山麓には、一窪田地区の銀山谷銅山と同時期の、大永年間から開発されたと伝えられる銅山跡が残っている。

城跡は、伊佐川沿いの山地上に点在するが、その位置は横波地区と同様に、蛇行する川の内側に突出する尾根先端部が選ばれている。

郷土史料としては、伊秩神社（大字佐津目）の棟札があり、最古のものは永禄・元亀年間のもので、それには「石州住・富永兵庫頭」の名が見える。毛利時代には、石州富山・要害山城主・富永山城守が山口・佐津目を領していたという。（籠川郡誌）

この地域の地名の中で城郭に関するものとして、矢ノ原、天竺、岩城、深瀬小丸、小丸がある。

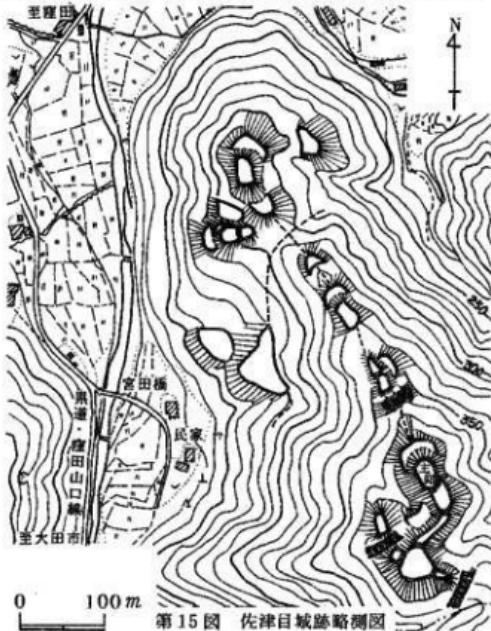
14. 佐津目城跡

（標高 390 m）

伊佐川右岸に迫る山頂部から、北東にのびる稜線上に掘り切り、曲輪を配置するもので、上佐津目（大田市）、中佐津目（佐田町）を眼下にみる位置にあり、境界の城であったものと推定される。

南東の主郭部の背後に続く稜線は、大掘り切りで遮断し、主郭北側の斜面を削り落して壁とし、直下の鞍部には平行に並ぶ3本の堅堀を設けて、敵の横移動を封じている。

北西にのびる丘陵の先端山頂には、物見のための櫓台を設けた形跡がみられるなど、やや発展がみ



第15図 佐津目城跡略図

られる城跡である。

15. 宮田城跡 (標高 250 m)

伊佐川左岸で、中佐
津目地区へ突出する小
山の先端部に設けられ
た城跡である。その一
周に伊秩神社がある。

城跡の構造としては
北側に曲輪群を配置し
丘陵の中央の主郭部と
みられる区画は、土塁
で囲んでいる。

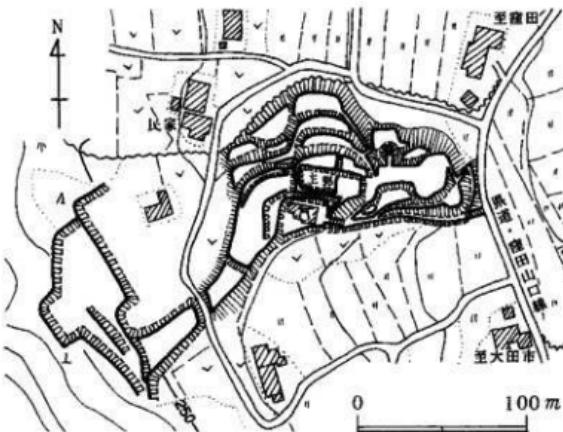
主郭の東側にある三
方からの登り道には、
屈曲性をもたせ、折を
設けるなど、横矢を意
図した構造がみられる。
小規模ながら迎撃性に富ん
だ城跡である。

この城は伊佐川をはさん
で佐津目城跡の対岸に位置
することから、その死角を
補完する目的のものと思わ
れ、幾度かの改修によって
現況にいたったことが考え
られる。

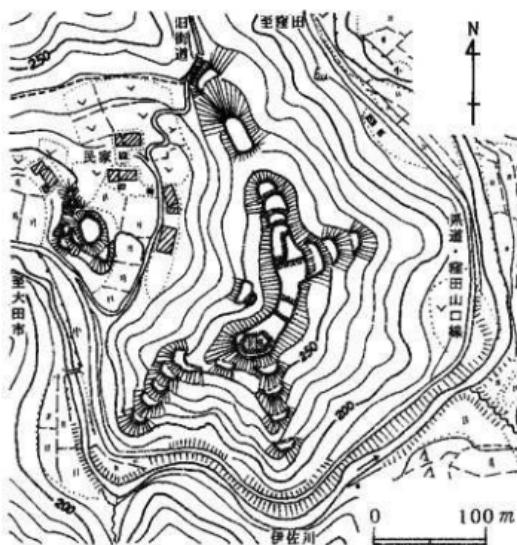
16. オノゾ城跡

(標高 272 m)

伊佐川が周囲を大きく迂
回して流れる丘陵上に設け
られた城跡で、稜線上と三
方に下降する各支尾根に、
曲輪群を配置しているが、
土塁や堀切りなどを伴わな



第16図 宮田城跡略測図



第17図 才ノゾ城跡略測図

い単純な構造である。

この城跡の北側は、旧街道の跡にあたり、南側の伊佐川対岸山裾には、中世から開発された銅山の坑口をはじめ、製銅に関連する遺構が点在していることから、これらの施設を防備するために設けられたものとも考えられる。

西側の小丸山は、この城に付随した砦跡と推定される。

17. 佐津目・三ツ子山城跡

(標高 370 m)

佐田町と多伎町、および大字佐津目と大字一鹿田との境界となる山上にあり、北方の谷は「境ヶ谷」と呼ばれている。

遺構は削平地と曲輪群からなるもので、単純な構造である。南東の山裾に突出する台地は、「深瀬小丸」の地名が残り、出丸跡と推定される。

現在は住宅地と耕地になっているが、周囲は斜面を削り落とし、各削平地の段差も大きく、かなりの規模の出丸であったと推定される。

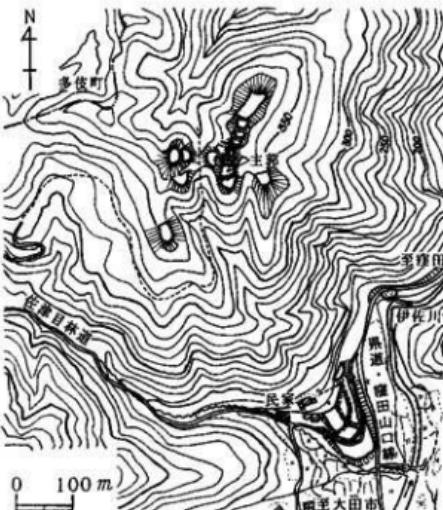
近世においては、北側山裾の「加賀谷鉱」で生産した鉄を、この山越えの街道を経由して、日本海沿岸部に輸送したといわれる。

(4) 大字高津屋地区

大字高津屋は、神戸川の支流である高津屋川沿いから、南東の山地に続く高地性の集落である。

「中古、権波の城主、吉野川の沿岸より攻撃する敵に備えるため、高く築いた望楼を建てた（城田山城主・岸氏）これを谷底から見ると、雲の上に見えたことから、高き家、高き屋と称するようになった」（佐田町史）といわれる。

城山山麓にある「七人塚」は、伊秩城が攻撃を受けた時、討死した武将の墓であると伝えている（佐田町史）。

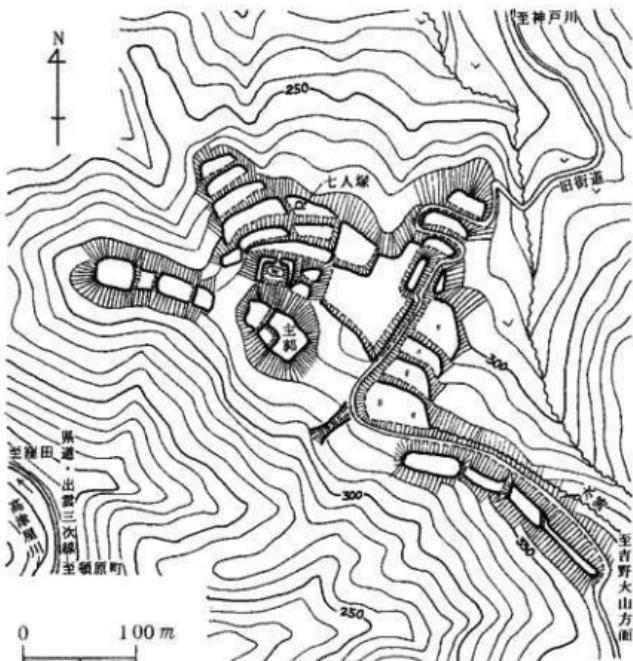


第18図 佐津目・三ツ子山城跡略圖

18. 城田山城跡（標高322m）

この城跡は神戸川沿いの低地から南東の山地に入ったところにあり、南方の吉野、大山方面に通じる旧街道を見下ろす位置にある。

山頂の主郭部の一隅に櫓台を設け、稜線上に曲輪群を配置しただけの単純な形であるが、街道はこの城郭の中を通過する仕組となっており、しかも通路は、この地点で狭くなっている。片側（東側）の水田には大量の水を引いた泥田堀として、一時に大兵力の通過を阻んでいることから、街道の抑えとして重視された城と推定される。七人塚の



第19図 城田山城跡略測図

伝説からおして、伊秩城の支城であったことも考えられる。

この周辺の地名には、馬場以後、受地小丸、七人塚土居畠ヶなどがある。

(5) 大字毛津地区

畠田地区の北端にあり、かつては神門郡・滑狭郷に属していた地域で、多伎町、湖殿町との境界に接する高地性の集落である。

地元の伝説によると、多伎町との境界にある「熊ヶ丸」には、田中某の居城があったと伝えている。地名として、小丸谷、勝負廻、段原、垣ノ内、政所、藏床などがある。

19. 熊ヶ丸跡（標高386m）

城のある山丘稜線は、佐田町と多伎町との境界で、高位置にある。

遺構は小範囲にまとまっており、中央の山頂から二方にのびる稜線と、支丘上に小規模な堀切りと曲輪を配置した単純な構造である。

山頂の削平地には、毛津地区で祠った金毘羅宮があったといわれ、東側山麓から部分的に谷側を土塁によって囲った登り道が続いている。

この城跡からは、毛津地内をはじめ、町内の山地や出雲平野が一望できる。

20. 猿谷城跡

(標高 250 ~ 300 m)

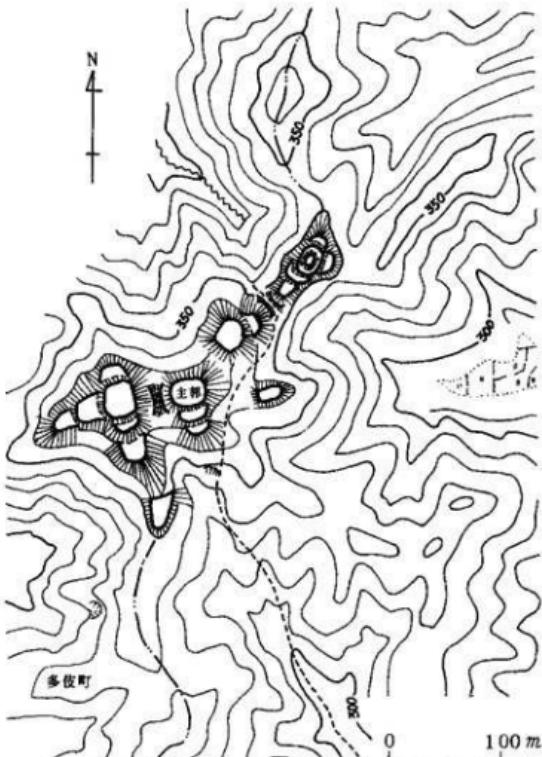
この城跡は、地域全体を城塞化したと思われるほど広範囲にわたって主郭や支丘の稜線上に曲輪、土塁が設けられているが、大別して3群に分けられる。しかし相互の主従関係は不明確で、一城別郭的形態ともみ

られる。それぞれの城郭に付随する各曲輪の配置など、遺構の状況から判断して、城の構えは北方から侵攻する敵を意識した構造であることが注意される。

3群の遺構の中で、毛津神社の社殿がある西側の山は、一部住宅、耕作地、作業道などで搅乱されている。西南の佐田・小田停車場線からの登り道は、堀切り状の通路となって稜線まで続く。稜線北端は、竪土塁や曲輪を配し、先端の頂部には櫓台を設けるなど、入念な構造が残る。

この山と、北側にのびる支尾根との間にある低地は、侵攻してきた敵は三方から包囲される形となり、小規模ではあるが、実戦的な構えをみせた形となっている。ここは「勝負廻」(小字名)と呼ばれている。

この城郭群の標高は、周辺の山地に比較してやや低位置にあるため、遠距離の展望に欠けるが、その弱点は、西側の「熊ヶ丸」によって補充されたものと考えられる。



第20図 熊ヶ丸跡略測図



第21図 後谷城跡略測図

(6) 大字東村地区

この地区は、大別して「東本郷」と「城川」に分けられている。

東本郷は主として神戸川右岸の段丘上に展開する集落で、左岸の吉栗山城、伊秩城に対向する地域である。

城川は、受地地区と萱野地区を総称する高地性の集落で、周辺の山地には城跡も多く、城川の地名が示すとおり、軍事的色彩の濃い地域である。

城郭群は、受地と萱野の集落を取り巻く形で展開するが、標高の高い位置の単純な構造の城から、低地に移るにしたがって、曲輪、堅城、堀切りなどの遺構が、創意的に配置されている。

こうした形態は、築城技法が時代の経過とともに発展した過程を示す資料として注目されよう。

史料として『出雲稽古今圖説』に「東村・古城主・岸馬之丞」の記載がみられ、地名には城川、城口、舞木、軍原、軍ノ前、軍尻、蛇喰、輪ノ内、矢ノ原、城山などがある。

また城川地区と、東側に隣接する大字大呂の御幡地区にかけて、龍上山、柏王寺があり、堂塔48坊があったが、尼子、毛利の鞍滝で全山焼失したと伝えられる。地名として、寺床、御堂屋内がのこる。

21. 三ツ子山城跡（標高489m）

この地域を代表する高山で、旧神門郡と飯石郡との境界の山である。

遺構は、三ツ子山の主峰と500m南側山頂（432m）の間に、曲輪と堀切りを設け、双方の山頂には広い削平地と一部に櫓台を設けた形跡がみられる。

堀切りは小規模なもので、急峻な自然地形に依存して、積極的に遮断を意図したものではなく、全体が単純で技巧性に乏しい。

三ツ子山山頂と尾根続きの頂部2か所に、巨石を組合せた灯籠、石柱、石祠がおかれているが、これは近世において、大山信仰、雨乞いなどの祭祀の場であったと伝えられる。



三ツ子山城跡の遠景

22. 輪ノ内城跡（標高320m）

三ツ子山の支尾根が西側の台地に突出する先端部にあり、尾根の東側を大堀切りで遮断し、西側に下降する稜線と鞍部に主郭、陸橋、曲輪、土塁を組み合せているが、特に空堀を創意的に配置した構造は、他の城跡ではみられない異質な発想で、発展過程を知るひとつの手がかりといえよう。

この城跡の西南側で谷に面する位置に高い土塁で囲んだ区画があり、その内部には建物跡とみられる地形が残る。

この周辺の地名が「蛇喰」となっていることから、監視目的の砦跡と推定される。

蛇喰の地名は八幡原地区にも残っている。（30頁参照）

23. 豊野城跡（標高356～400m）

「三ツ子山」「輪ノ内」の各城から西側の谷を隔てた山上にあり、東側山麓の豊野、受地地区は、棚田が展開する斜面に住宅がまばらに点在する地域である。



第23図 輪ノ内城跡略図

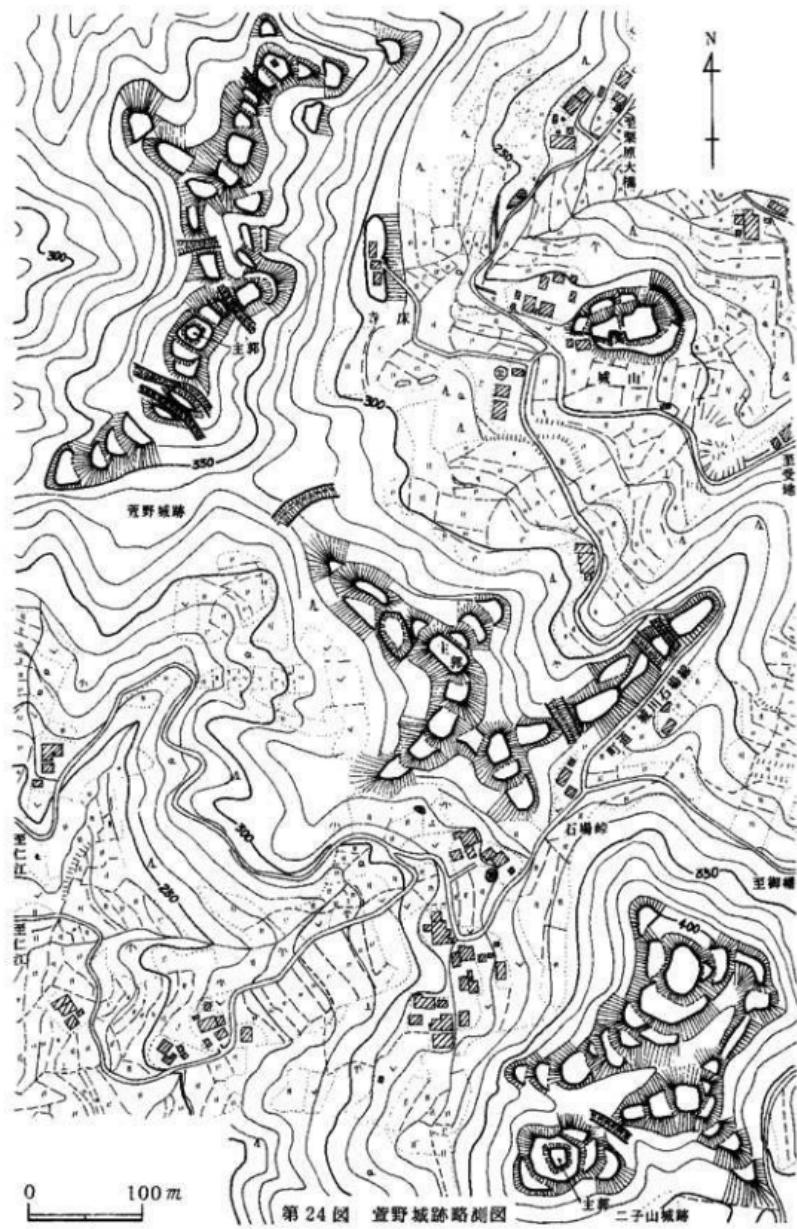


第22図 三ツ子山城跡略図

城跡は二つの山丘にひろがり、豊野、受地地区を見下ろしている。

主郭は北側の山塊の最高地点におかれ、中心部に櫓台を設けた形跡がみられる。主郭から北に下降する稜線と支尾根には、腰曲輪、堀切り、曲輪群を配置している。主郭部の南西側斜面は削り落した壁面として、直下の基部を二重堀切りで遮断し、続いて西側に降りる緩斜面には曲輪を配置している。

主郭から南東に降りた大きな鞍部は、堀切りで遮断するが、連続する南東の山塊の頂上と稜線、さらに支尾根に曲輪群を配置しており、この山塊の曲輪群は一つのまとまりを示している。



特に、東側へ舌状に下降する尾根には、堀切りと曲輪を連続させるなど、造構は広範囲におよぶ。また萱野地区の中央部の台地上には、出丸を配置するなど、地域全体の防御を意図した実戦的な構成である。台地上の出丸は、地名が「城山」となっており、頂部は広い削平地となっていることから、何らかの施設が設けられていたものと推定される。

この城郭群配置の形は、毛津地区（24頁参照）に共通するもので、一城別郭的形態となっている。

萱野城跡から南側の峠を隔てた南の山上には、二子山城跡（大字一庭田）がある。この城跡は萱野城跡に比較して、周囲の展望を重視した占地である。（15頁参照）

24. 東本郷砦跡

（標高 258 m）

萱野城山の支尾根が神戸川沿岸までのび、その先端は更に北西と西方向に分岐するが、その双方の先端に設けられたもので、曲輪、堀切りを組合せた小規模な構造の若跡と推定される遺跡である。北西側にのびる稜線上の曲輪は、土壘によって囲んだ区画もあり、単なる監視、伝達だけでなく、萱野城の出丸としての機能も備えていたものと考えられる。

25. 城川口砦跡

（標高 160 m）

東本郷砦と同じく、萱野城山からの丘陵が、神戸川沿いの地点までのびた先端部にある。

造構は、北東にのびる岩尾根上に細長く曲輪、堀切り、土壘を直線上に



第25図 東本郷砦跡略測図

配し、最先端に立上る小山は「物見櫓」の目的をもつたもので、途中の稜線上には「のろし穴」とみられる区画があった。

背後の稜線基部（神社南側）は堀切りで遮断しているが、これは旧街道の幹にあたることから、監視と伝達を目的としながら、街道の抑えとして配置され、東本郷とともに、この砦は萱野城に付随したものと推定される。

(?) 大字八幡原地区

神戸川は、この地域で沖積面を更に大きく広げ、近世以降の新田開発による農耕地と集落が両岸に展開する。

この地点は、旧神門郡と飯石郡との境界をなし、また北側は出雲市、朝陵町とも接することから、各地に通ずる街道の要衝となっていたところである。

集落地（川北地区）の北側に連なる山地には、城跡とともに中世の寺跡と伝えられる地形も残り、地名に大門、ゴワン、ジゲン、ジゲンボウ（修驗坊と推定）などがある。

また、城郭に関する地名として、横見垣内、場床、蛇喰、蛇見、大寄合、札場があるが、この中で蛇喰は大字東村や東西須佐地区にもあり、この地名のつく地点には「砦跡」が残っていることから、じゃばんは「城番」が変化した地名と推定される。（27頁参照）

28. 八幡原城跡（標高320m）

神戸川左岸の、川に平行して北東にのびるやせ尾根上に連続する曲輪群と、東

側山頂部の広い削平地、また神戸川に向って下降する各支尾根の先端部に、曲輪群を配置した



第26図 城川口砦跡略測図

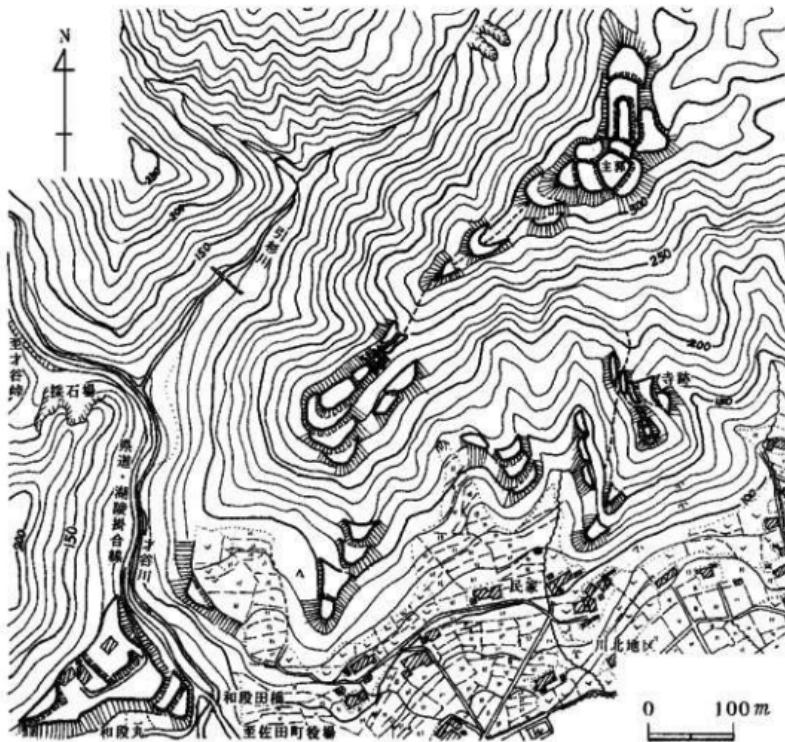


第27図 蛇喰砦跡略測図

城跡で、その構造は単純で技巧性に乏しい。

東側の南下する支尾根の先端は、円錐状に巍く立上る小山であるが、これは「物見櫓」の機能をもったものと考えられる。この稜線の鞍部と東側の谷に面する斜面の削平地は、中世の寺、修驗場の跡と伝えられている。

この城山から才谷川を隔てた西側の低地に突出する台地を「和段丸」とよび、南側の神戸川対岸の小山上には「蛇喰」とよぶ砦跡がある。いずれも街道を見下ろす地点であることから、八幡原城の死角を補完することと、街道の抑えを兼ねた出丸と推定され、単純な構造ながら地理的条件を配慮した占地といえる。



第28図 八幡原城跡略測図

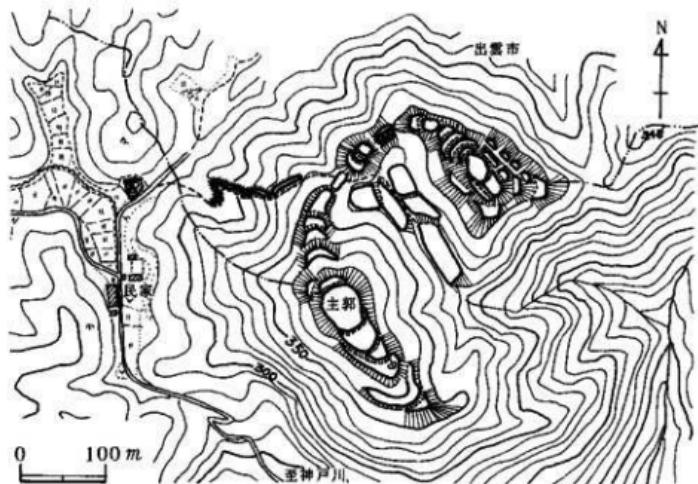
27. 二百山城跡 (標高 297 m)

八幡原城の東側にあり、二つの山丘に城郭が分布する。稜線は佐田町と出雲市乙立町との境界を示している。

城跡の大手道は、西側山裾の溜池付近から登り、稜線鞍部に通じ、その道に沿って土塁が設けられている。鞍部から東側の山塊の頂上は削平されていて、周囲の斜面には帯曲輪状に曲輪群が配置されている。南側の頂上にも広い削平地があり、山頂から南の緩斜面には削平地が続き、湧水池もみられる。この二つの主従関係は不明確であるが、標高の高い南側の方を主郭と考えたい。

城の構造は、単純で技巧性に欠けるが、主要な街道が集中するという地理的、地形的条件が占地の理由と考えられ、一城別郭の形態をもった城跡である。

伝承によると「千木因幡守」の居城があった（乙立史）といわれ、近くに「千木」の地名も残る。この西側山麓には「大寄合」の地名があり、内陸部と沿岸部の2方向に分かれる街道の四つ辻で、近世まで多くの人家があり、札場、篤麗立などの地名も残っている。



第29図 二百山城跡略測図

注1、天保年間に成立した渡邊^{ひさし}森の著。出雲国内の故事、名勝旧跡、産物、

詩歌、伝承などを紹介した地誌。

注2、享保2年(1712)に黒沢長尚によって完成した出雲国内の社寺、旧跡、主な山や川を記録した地誌。

3. 生産遺跡

(1) 鉛 跡

彦田地区では 11か所の鉛跡が確認されているが、この中に近世の鉛文書に登場する植原鉛（上橋波）と加賀谷鉛（一庭田）がある。また、発掘調査によって島根県指定史跡となった「朝日鉛跡」（高津屋）は、発掘当時の状態をそのまま保存、整備されて一般に公開されている。

そのほかの鉛跡も、近世に操業されたとみられる永代鉛がある。また中には、野鉛と推定されるものが、大字東村と大字八幡原でみられる。

前述の植原鉛は文書によると、天明年間に操業のあと、移転したことになっているが、遺構の規模から推定して、再利用または再々利用されたことが考えられる。

加賀谷鉛は、文久年間から明治 15 年まで操業されているが、この鉛も再利用された形跡がみられる。（注 1）

二つの鉛は、いずれも田儀・桜井家の経営によるものである。

朝日鉛跡は、昭和 57 年に発掘調査を行なった遺跡であるが、その報告の要旨を述べてみる。

朝日鉛跡の地下構造

朝日鉛跡の地下構造は、従来までの調査例ではみられなかった規模のもので、排水、除湿、保溫のための綿密な配慮がなされている点が注意される。

そのねらいは、高熱によって発生しやすい地下の水蒸気爆発を防止し、炉内の水分を排除することによって、砂鉄の還元作用を容易にすることと、炉内の温度を高温で維持させることである。

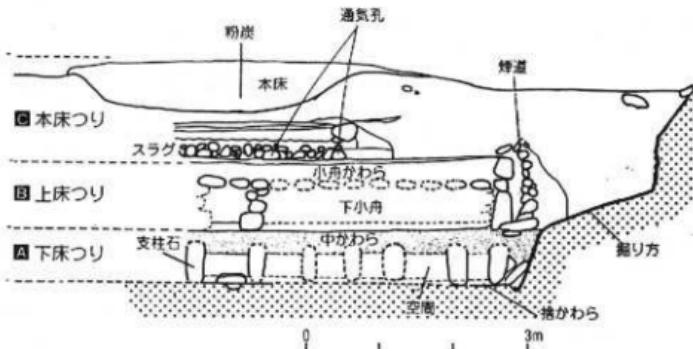
第 30 図に示す A の部分を「下床つり」と称する。掘り方の床面は粘土のたたきとなっていて、床面には周囲、中央部横断、対角線に溝が掘られ、石蓋がかけられている。これを「伏せ縫」といい、この溝は掘り方の両側から上部の床面まで立上がる「気抜穴」に通ずる。床面に柱状の自然石が等間隔で立てられ、上段の厚い粘土床を支える「ツカ」の役割をもたせている。床下にあたる部分は空洞となっている。この空洞は周囲から浸透し「伏せ縫」に集められた水分を高熱で気化し、「気抜穴」から外部に排出するという蒸気爆発を防ぐ余裕空間であり、また炉の下部の冷却を防ぐ空気室の役割ももっていると考えられる。

B の部分を「上床つり」と称する。下から 2 段目の部分で、中心を縱断する石組みのトンネルは「下小舟」と称する乾燥焚きのための施設である。

この両側にも支柱として石を立て、上部に小石を積んで高さの調整をはかり、上段の床を支えているが、この部分は空洞ではなく、通気性のよい火山灰（黒ボク）が充填されている。

C の部分は「本床つり」といい、最上段の舟形構造（本床）を支える部分で、この舟形の上に炉が築かれるため、もっとも重視されるところである。本床の両側には並行して「小舟」と呼ばれるトンネル状の、石組みの火道が設けられているが、これは「下小舟」と同じく乾燥焚きの施設である。

本床下の「小舟かわら」の上面には、鉄滓が散きつめられていたが、この部分には水平に走



第30図 朝日鉛跡炉床中央断面図

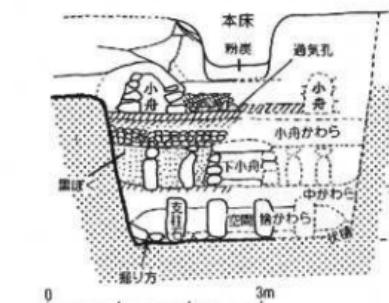
る小さな通気孔が通じており、本床を横断して両側の小舟に連続するものが 5 本と、中央を縦断する 1 本がある。

この通気孔は、本床下の温度を均一に配分しながら、保温効果を高める意図によるものと考えられる。

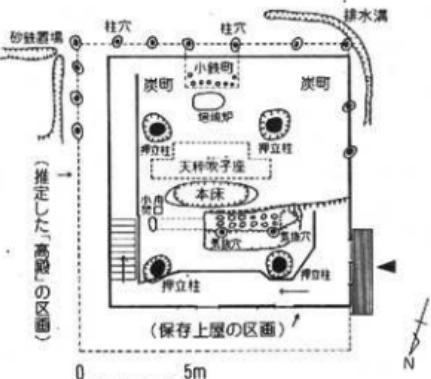
以上、説明した地下の設備は「照らし焼」（乾燥焚き）によって水分を完全に除去したあと、焼土によって埋められたられ、地下に埋没する。

製鉄炉や送風装置（天秤ふいご）など鉄づくりの施設と、それらを収容する建物（高殿）は、埋没した地下構造の上に設けられていたのである。

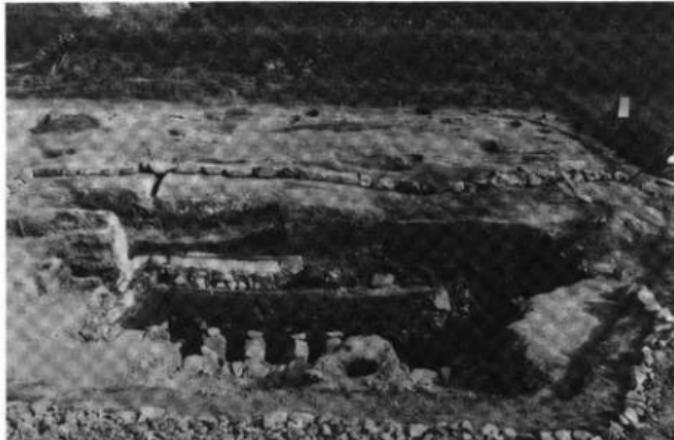
朝日鉱の高級周辺には、粗鋼を精練する「鍛冶職場」のほかに、元小屋（事務所）、住宅（長屋）、炭小屋、砂鉄洗場、金屋子神社などがあり、これらは一連の製鉄機関としての機能をもつていた施設の遺跡である。



第31図 朝日鉢跡炉床中央横断面図



第32図 朝日鉢跡の遺構平面から推定した高層配置図



朝日鉱跡発掘直後の状況

(2) 銅山跡

銅山跡は、大字一座田・銀山谷と、大字佐津目・矢ノ原にあり、いずれも中世（大永年間）に開発されたものと伝えられている。

銀山谷銅山は、中世以降、断続的に探掘されて、昭和年代まで続いているが、現在確認できる坑口は堅穴坑が1か所で、付属する精錬施設などは見られない。

佐津目地区の銅山は、伊佐川右岸の谷筋の各所に坑口が残り、精錬所跡は3か所に点在し、鉱滓が今も堆積している。

近世の寺院縁起書（注3）によると、最盛期には山の安全を祈願する寺社も多く、山稼職人の家が千軒余あったと伝えている。

(3) 窯跡

窯跡は、瓦窯跡が大字毛津に2か所、大字一座田（舟岡、仁江）に2か所が確認されているが、いずれも近代初期のもので、活動した期間は短かったようである。

(4) 炭窯跡

現在、町内の山地で使用されている炭焼窯は、煉瓦や粘土を積上げ、その上に覆屋を設けた地上式のものが一般的であるが、大字下橋波の「小池城跡」の支尾根では、山腹の岩盤を横穴状にくり抜き、奥壁に副室を設け、そこから煙道を垂直に稜線上まで立上がらせた窯跡が検出された。

この形式のものは、東須佐地区・大字朝原の「原山鉱跡」近くでも発見されている。

古老は、この形式の窯が使用されたことを知らないというが、内部は熱によって岩肌が変質し、また赤黒く変色した上に煙道内部にはタールが厚く付着していることから、使用されたことは間違いない、大量の木炭を必要とした「鉛製鉄」の時代に対応したものと考えられる。

4. 祭祀遺跡

三ツ子山（大字東村）山頂と、その続き尾根になる小山山頂の2か所に、巨石を組み合せた灯籠、石祠、石塔が存在するが、碑文はみられない。

この地点は
いずれも城跡
の遺構が認め
られるところ
である。

（27頁参照）

伝承による
と、これらの
石造物は大山
信仰のための
ものである。
また、雨乞い
の祭りが行わ

れた場である

といわれている。



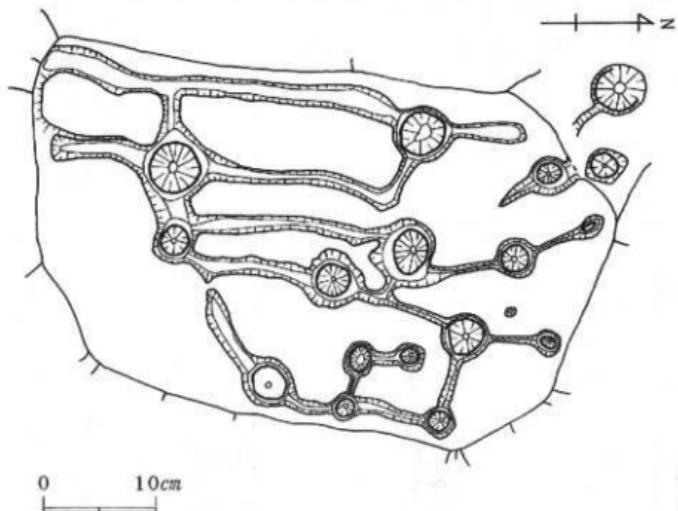
三ツ子山山頂の石造物

寺院跡は、大字一塙田の「伊秩城跡」南側山腹に「智光寺跡」がある。また大字東村の「壹野城跡」東側の山腹一帯や大字八幡原にある「八幡原城跡」の東側山腹に寺院跡と伝えられる地名と地形が残るが、遺物などは発見されていない。

神社跡は、大字佐津目的「三味線坑」と呼ばれる銅山の坑口近くに、銅山の安全を祈願した「山神社」の跡があり、大字一塙田の「吉栗山城跡」の西側山腹に「三所神社」跡地がある。大字下橋波・宮の郷地区にある水田の一隅には、小児の頭大程の石が積まれた区画があるが、伝説によると『出雲國風土記』の「波須波神社」の祭神降臨の場所という。これは社殿発生以前の「磐境」とみられる形態のものである。

特殊なものとして、大字一塙田地区の伊秩城山（古城山）の中腹に「かわこの証文岩」と呼ばれている岩がある。伝説によると、昔、伊秩城主が神戸川の瀬で馬を洗っていると『河童』（この地方ではかわこと呼ぶ）が馬に吸いついた。馬は驚いて河童を殴りつけたまま城山へ走って帰ったことから、城主は立腹し、河童を捕えて威嚇しようとした。そこで河童は命乞いをし、二度と人馬に害を与えないことを約束し、その証として岩肌に詫文を書いた。という話である。

その「証文」の形態は、岩の上面に大小の盃状の穴を掘り、各穴の間を溝で連結しているもので、祭祠または呪術にかかるものと考えられ、「盃状穴」の一形式ともみられる。



第33図 伊秩城跡山腹の岩上に刻まれた盃状穴平面図

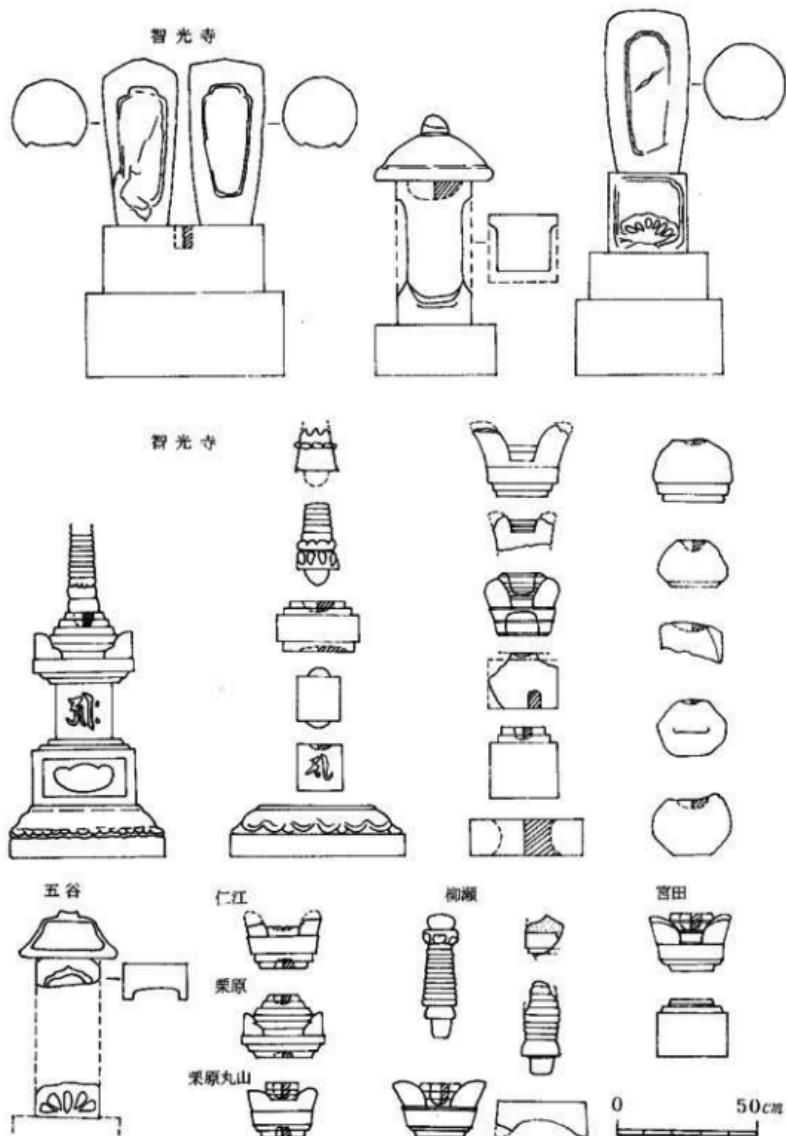
5. 古墓・塔

古墓は、伊秩城跡の南山裾（智光寺跡付近）に宝鏡印塔のはば完形のもの1基と、数基分の残欠および五輪塔の残欠、そのほか無縫塔、笠塔婆がある。

また吉栗山城跡の東山麓に宝鏡印塔の笠が2基分、上橋波の御瀬城跡東山麓に宝鏡印塔の残欠2基、一産田の舟岡着跡南山麓と佐津目の宮田城跡南側で民家の裏山に、それぞれ宝鏡印塔の残欠（1基分）がみられる。



伊秩城跡山麓の古墓群



第34図 古墓・石塔・石燈の残欠実測図

宝鏡印塔の所在地はいずれも城砦跡近くであり、「武士の墓」という地元の伝承を裏付けている感がある。

塚については、伊秩屋の南支尾根先端で「段ノ辻」と呼ばれる山頂の削平地に、無数の川石を積んだ塚らしいものがあったと伝えられるが、現状は荒廃しており実体は不明である。大字高津屋の「城田山城跡」山麓の「七人塚」は、戦死した武士の墓と伝えられるが、塚の実体はなく、数個の川石が置かれているだけのものである。

6. 遺物散布地

(1) 橋波遺跡

大字下橋波の元橋波小学校（現在は廃校）敷地を拡張する際に、「土製支脚」が出土したことが伝えられているが、その位置は屋内体育館が建っている敷地付近と推定される。

遺物は、町外に流出していることから、現在その所在確認が急がれているところである。

(2) 朝日遺跡

昭和57年に大字高津屋・朝日地区で朝日鉱発掘調査の際、高殿跡床面の旧表土層に土塊が検出され、北側小舟付近の埋土中からは、二次的に熱変化をうけた陶片が出土した。この遺物は埋設土からのものであることから、この周辺から運びこまれたものと思われる。

以下、出土遺物について、朝日鉱発掘調査報告書（注2）をもとに説明する。

遺物（1～5・8・10・13）は粗製陶文土器の深鉢片で、内面は横ナデ仕上げであるが、外

面は荒く、削放

しのままの粗製

である。胎土に

細砂粒を含むや

や薄手のもので

ある。口唇は削

り、または横ナ

デで平頭のもの

（1・2・3）

と尖るもの（4

・5）があり、

外面に反りをも

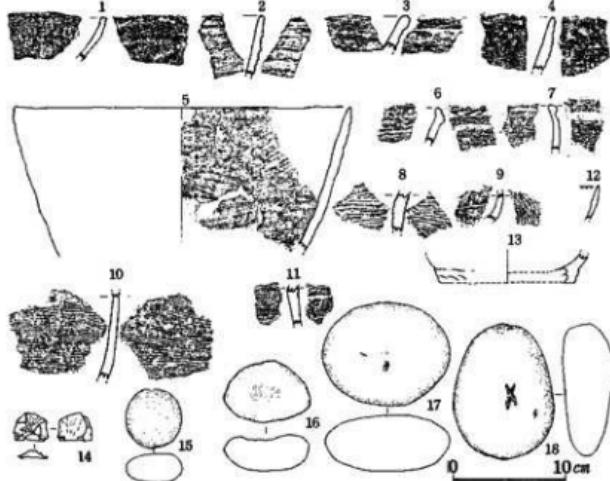
つように割り出

すもの（3）も

ある。また内外

面とも調整条痕

がみられるもの



第35図 朝日遺跡出土遺物実測図

（佐野町教育委員会『朝日鉱』より）

(8・10) があり、貝殻腹縁によるものもみられる。底部(13)は、平底でツマミ出しの手法が明瞭である。

精製土器片もわずかにみられ、(6)は肥厚した口縁が波状をなすものの破片とみられ、その口唇外面のみを細粒の繩文地とし、そこに横V字形の刺突文を連続させている。器壁内面は横ナデで、外面には磨消された部分が認められる。(7)は内傾する口縁の上端と外唇を平らに削って細粒の繩文施文帯とし、口縁に沿って削りの凹線をめぐらせ、以下は粗略にナデ仕上げをしている。また、これに類するものとして、細粒繩文地の胸部(9)があるが、逆撫りである。これは権現山遺跡などからの出土土器に類似する縁帶文土器で、磨消繩文土器の新しい要素のものである。

(11・12) は磨研土器で、複条の沈線(11)もみられる。二次的な熱変化によって色調は明確ではないが、黒色(11)と褐色(12)であろう。宮瀬式系の土器とみられる。

石器類では、チャート質の剥片(14)が焼土中に混在していた。また、上面にわずかな叩痕のある磨石(17)が高殿南東部の元山押立柱の柱穴埋土中から採取された。花崗岩製でやや長円形をなし、全面がよく磨かれている。

この近くで(15)の小磨石も採取された。一端にわずかな叩痕がある。(16)はやや粗粒質の花崗岩の自然円錐で、中央に叩痕が残る。小形の凹石である。(18)は花崗岩の叩石で、長軸両端に叩痕があり、面の中央には「×」字状の擦切痕がある。いずれも北小舟西側焚口付近の焼土中から採取された。

以上のような遺物の組合せは、近隣の三刀屋町宮田遺跡の出土遺物に類似するものである。また奥出雲の下鴨倉遺跡、幕地遺跡、王貢遺跡などにも一部共通するものが出土している。

本遺物は繩文時代後期後半へ末葉のものと判断される。また深い大形の土壙は、これに伴う墓壙とみられ、この場所は繩文人の一時的な生活舞台であったものであろう。高津屋川の大きく迂回する地点に張り出した立地も、出雲郡山間地帯の後期繩文遺跡の立地に共通するものである。

(3) じょうか 城川遺跡

昭和50年代に谷川の改良工事現場で出土した「茶臼」の下段部分である。臼の直径は15cmをはかる。

現場の両側は急斜面であることから、これは上方斜面のいずれかから転落したものと推定される。

この地域の西側山上には、壹野城跡(27頁参照)の遺構が南北に長く連なり、その中間の山腹には、中世に存在したと伝えられる寺院などがある。

出土地点は、地すべり工事などで現状が大きくなってしまっている。



城川遺跡出土・茶臼

(4) 門曲遺跡

昭和63年3月、佐田町の最南端の大字上横波、門曲地内で県道、出雲・三次線の改良工事が進められており、その基礎工事として、県道沿いの水田の耕作土が延長300mにわたって堀上げられた。

その耕作土の探索を行ったところ、古墳時代後期（山陰の須恵編年・IV期）と推定される須恵器片（壺）および土師器片や、中世のものと推定される土器片等が検出された。

この下流の元横波小学校敷地から土製支脚が出土した、という記録があり、横波地区の神戸川の両岸の山地には中世の山城跡が多い。

門曲地区で出土した遺物は、古代から中世にかけての遺跡の存在を示す資料として注目される。

- 注1. 文政3年（1820）に、鉄師頭取から藩に提出された「鉄打替」に関する願書
(田儀桜井家文書)
2. 烏根県佐田町教育委員会「朝日鉄」（昭和58年3月）
3. 「大日山乘籠庵由来略記」（『佐田町史』（1976）所収）

参考文献

埋蔵文化財発掘調査の手びき	1981	文化庁文化財保護部
日本城郭史の再検討	1980	鳥羽正雄（名著出版）
中世城郭研究（創刊号）	1987	中世城郭研究会
朝日鉄（発掘調査報告書）	1983	佐田町教育委員会

郷土資料

佐田町史	1976	佐田町・佐田町教育委員会
佐田町の民俗文化遺産	1982	佐田町・佐田町教育委員会
佐田町内小字名調査表	1986	佐田町教育委員会
伊秩神社棟札		佐田町大字佐津目、伊秩神社

佐田町埋蔵文化財詳細分布調査報告 2

佐田地区

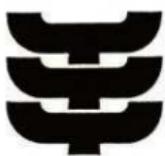
発行者 島根県簸川郡佐田町大字反辺

佐田町教育委員会

1988年3月22日 印刷

1988年3月25日 発行

印刷者 島根県出雲市今市町 宇田印刷



文化財愛護
シンボルマーク